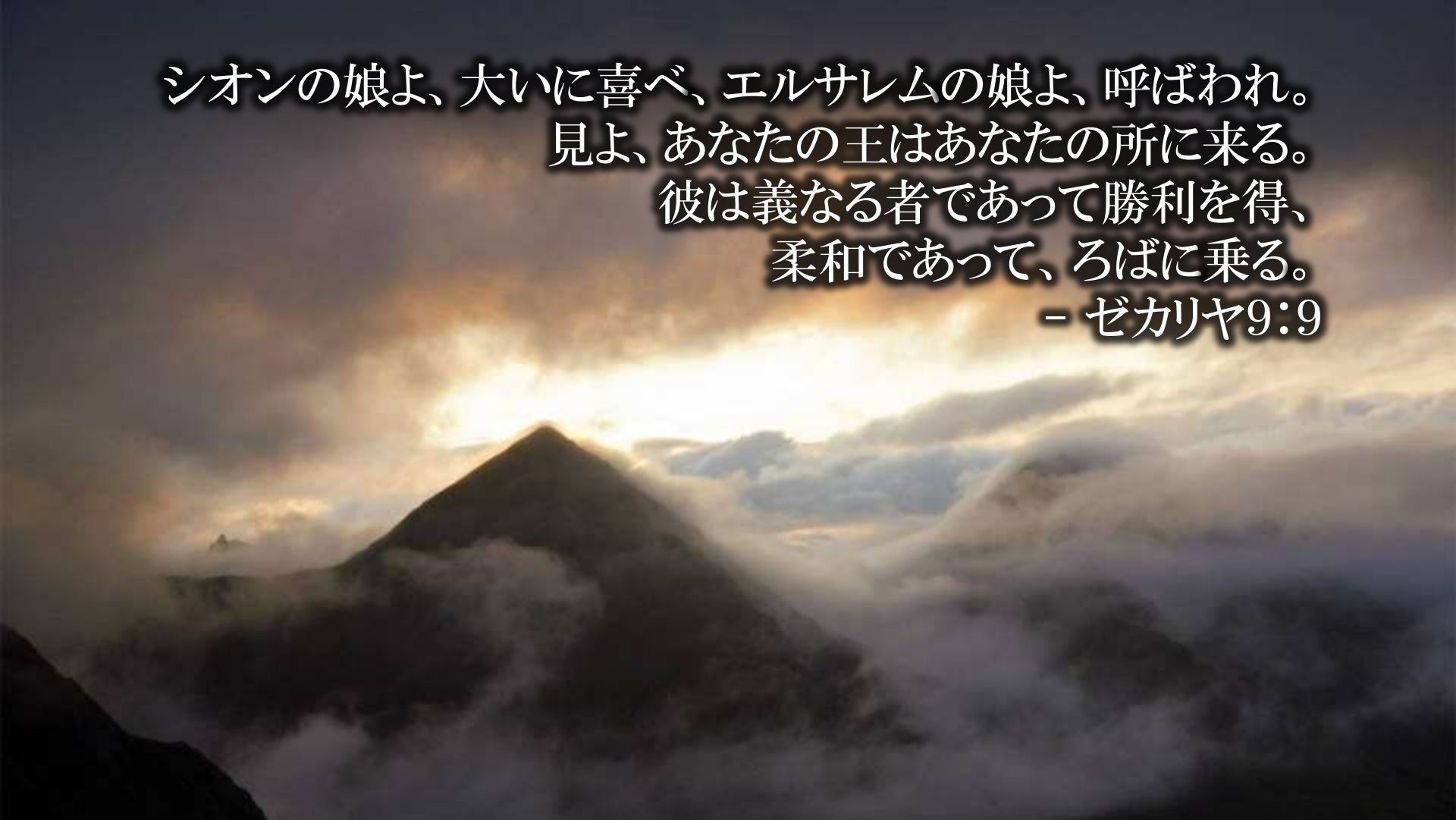
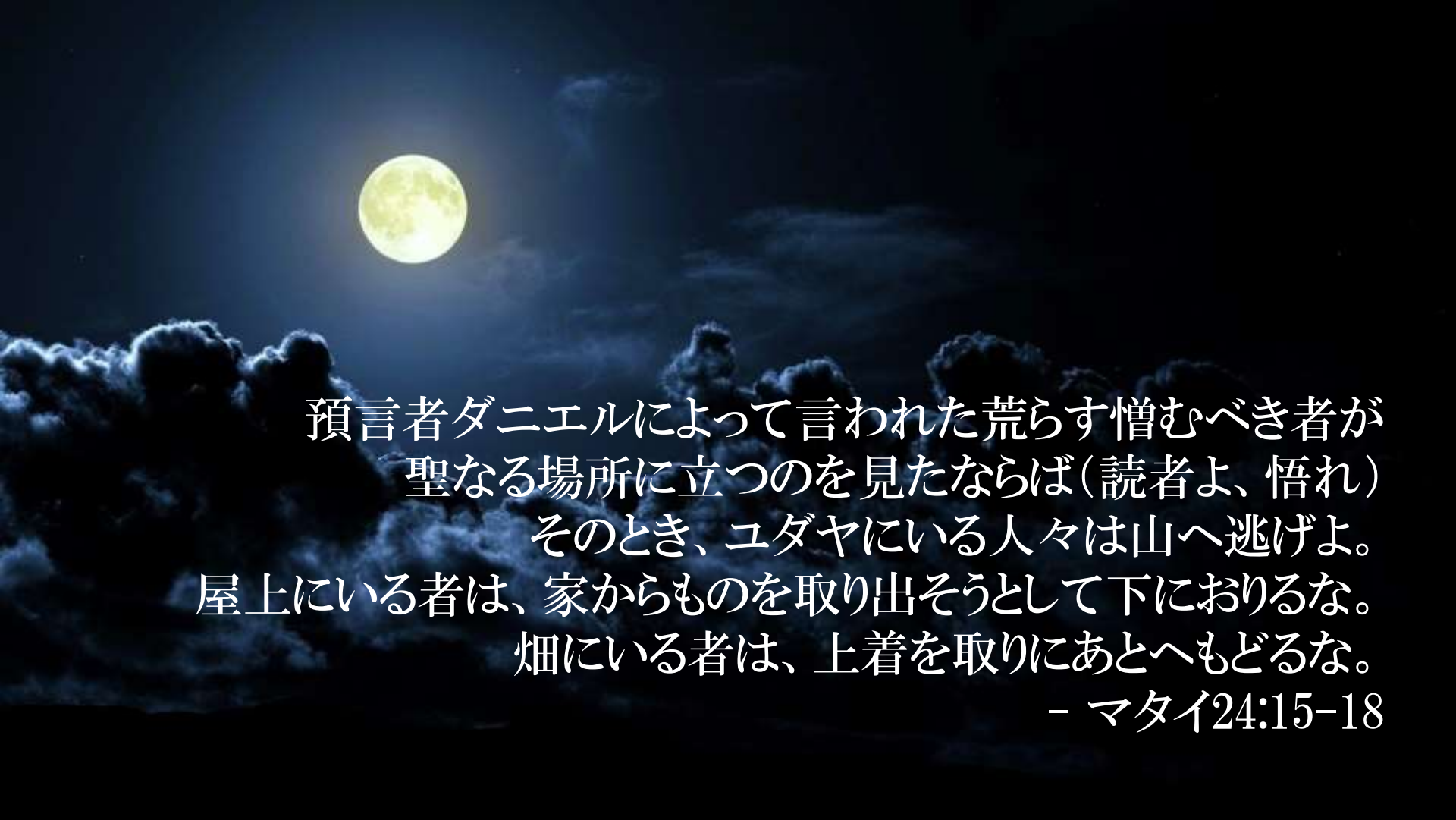


「嵐に備えて」



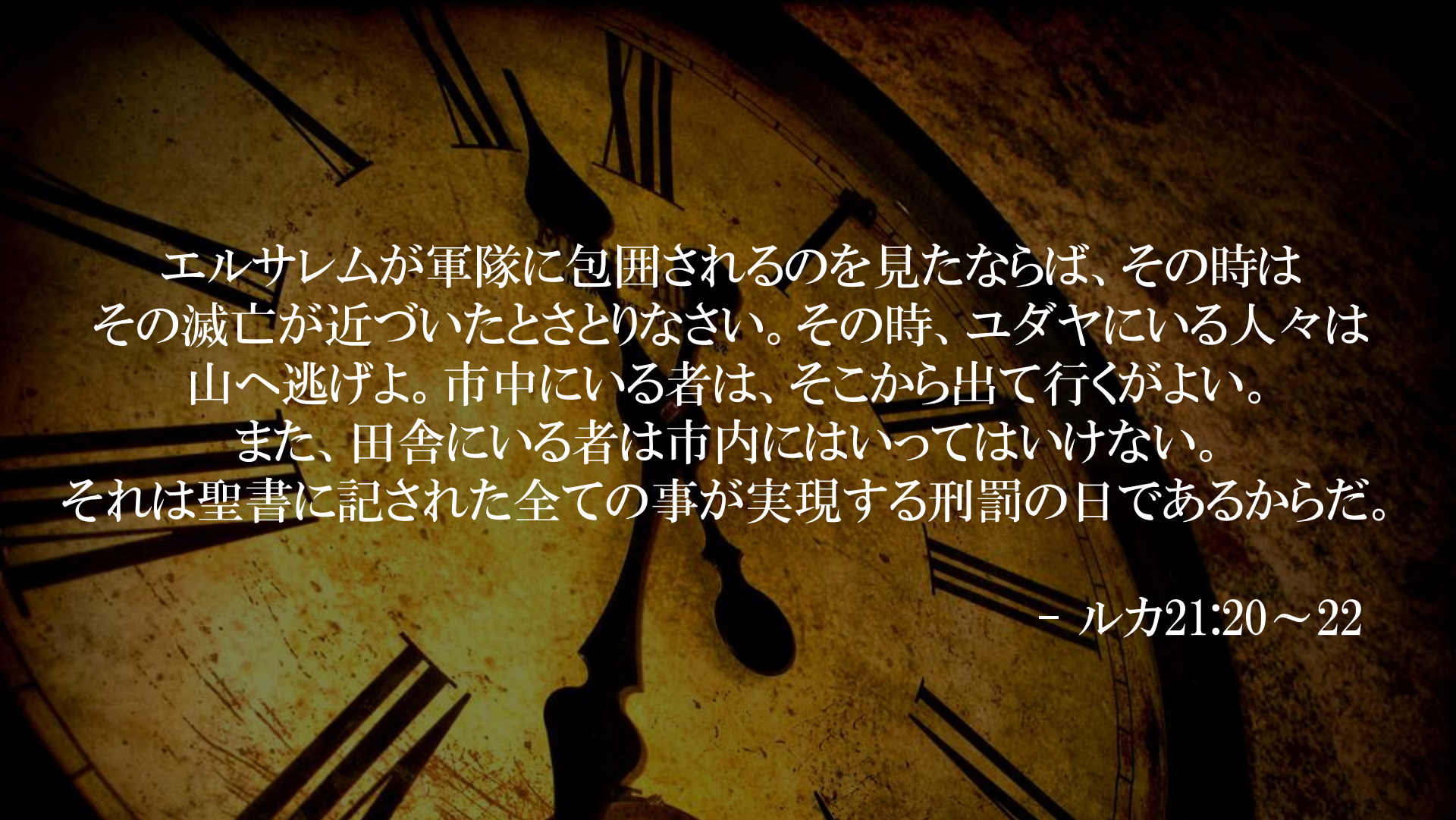


シオンの娘よ、大いに喜び、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。
見よ、あなたの王はあなたの所に来る。
彼は義なる者であって勝利を得、
柔和であって、ろばに乗る。
- ゼカリヤ9:9




預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が
聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)
そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。
屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりるな。
畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。

- マタイ24:15-18




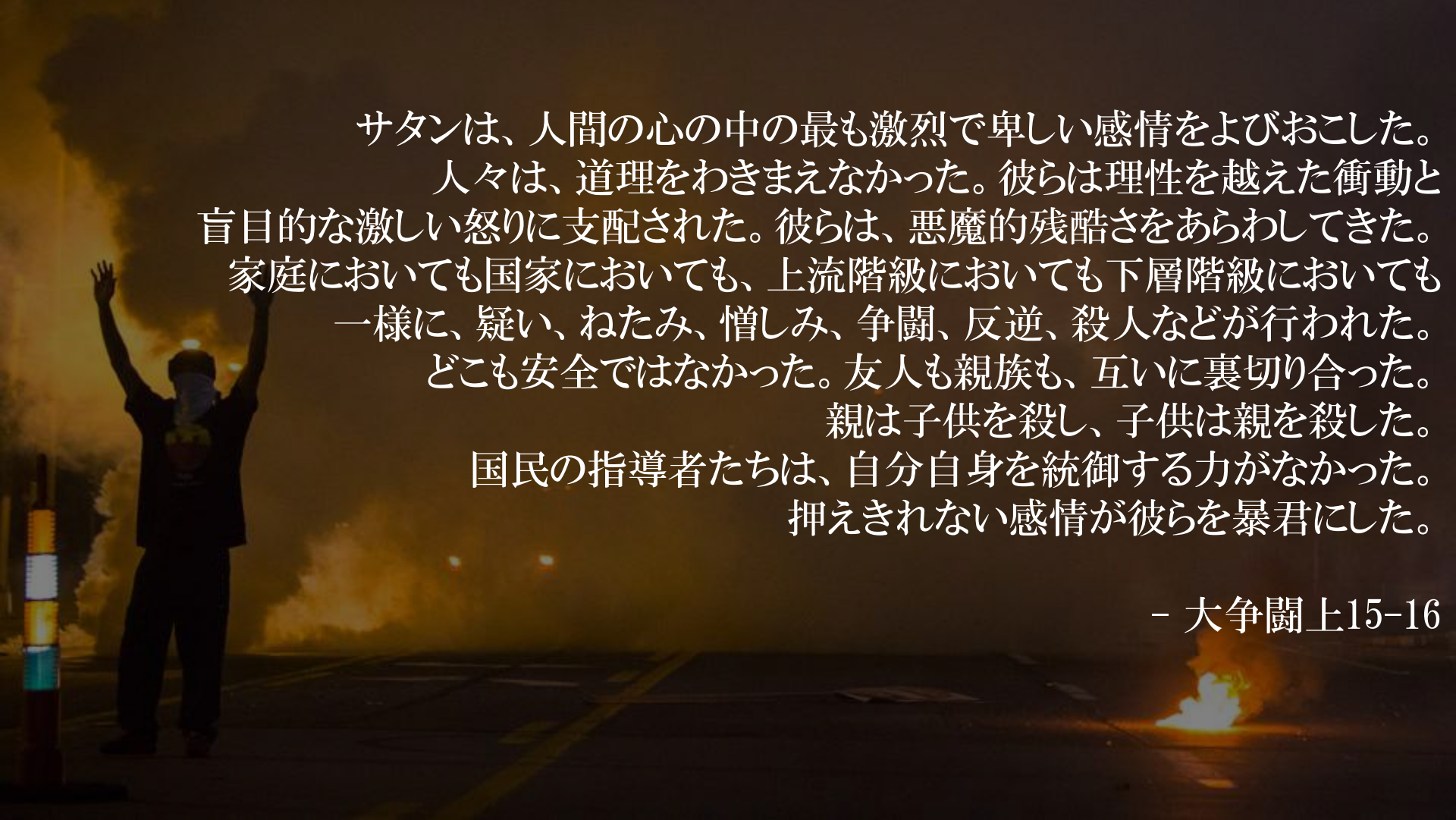
エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、その時は
その滅亡が近づいたとさとりなさい。その時、ユダヤにいる人々は
山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい。
また、田舎にいる者は市内にはいってはいけない。
それは聖書に記された全ての事が実現する刑罰の日であるからだ。

- ルカ21:20~22



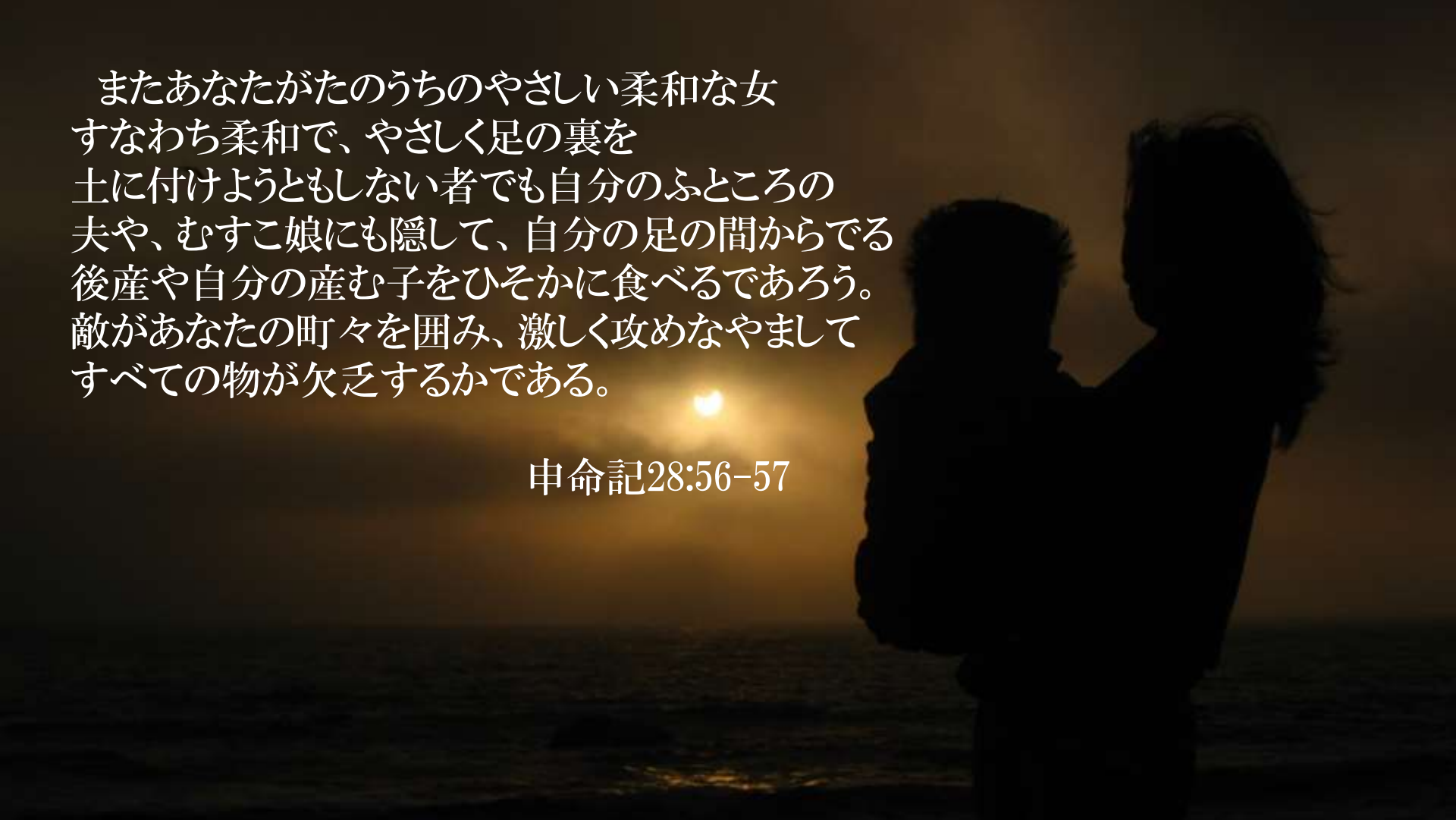
無数の者が、飢えと病気で倒れた。
人間本来の自然な愛情は失われてしまったように思われた。
夫は妻から、妻は夫から奪った。
子供は、老いた親の口から食物をもぎ取った。(大争鬪上19)



A person in silhouette stands on the left side of the frame with their arms raised. The background is a dark, smoky environment with a large fire or explosion on the right side, casting a bright orange glow. The overall scene suggests a moment of protest or a scene of chaos.

サタンは、人間の心の中の最も激烈で卑しい感情をよびおこした。
人々は、道理をわきまえなかった。彼らは理性を越えた衝動と
盲目的な激しい怒りに支配された。彼らは、悪魔的残酷さをあらわしてきた。
家庭においても国家においても、上流階級においても下層階級においても
一様に、疑い、ねたみ、憎しみ、争鬪、反逆、殺人などが行われた。
どこも安全ではなかった。友人も親族も、互いに裏切り合った。
親は子供を殺し、子供は親を殺した。
国民の指導者たちは、自分自身を統御する力がなかった。
押えきれない感情が彼らを暴君にした。

- 大争鬪上15-16

The background of the image shows the dark silhouettes of a man and a woman embracing. They are positioned on the right side of the frame, with the woman's head resting on the man's shoulder. The background is a soft, golden glow from a low sun, likely at sunset or sunrise, over a body of water. The overall mood is intimate and contemplative.

またあなたがたのうちのやさしい柔和な女
すなわち柔和で、やさしく足の裏を
土に付けようとしてもしない者でも自分のふところの
夫や、むすこ娘にも隠して、自分の足の間からでる
後産や自分の産む子をひそかに食べるであろう。
敵があなたの町々を囲み、激しく攻めなやまして
すべての物が欠乏するかである。

申命記28:56-57

わが民の娘の滅びる時には、情深い女たちさえも
手ずから自分の子どもを煮て、それを食物とした。

- 哀歌4:10

大争闘上巻 20-22ページより

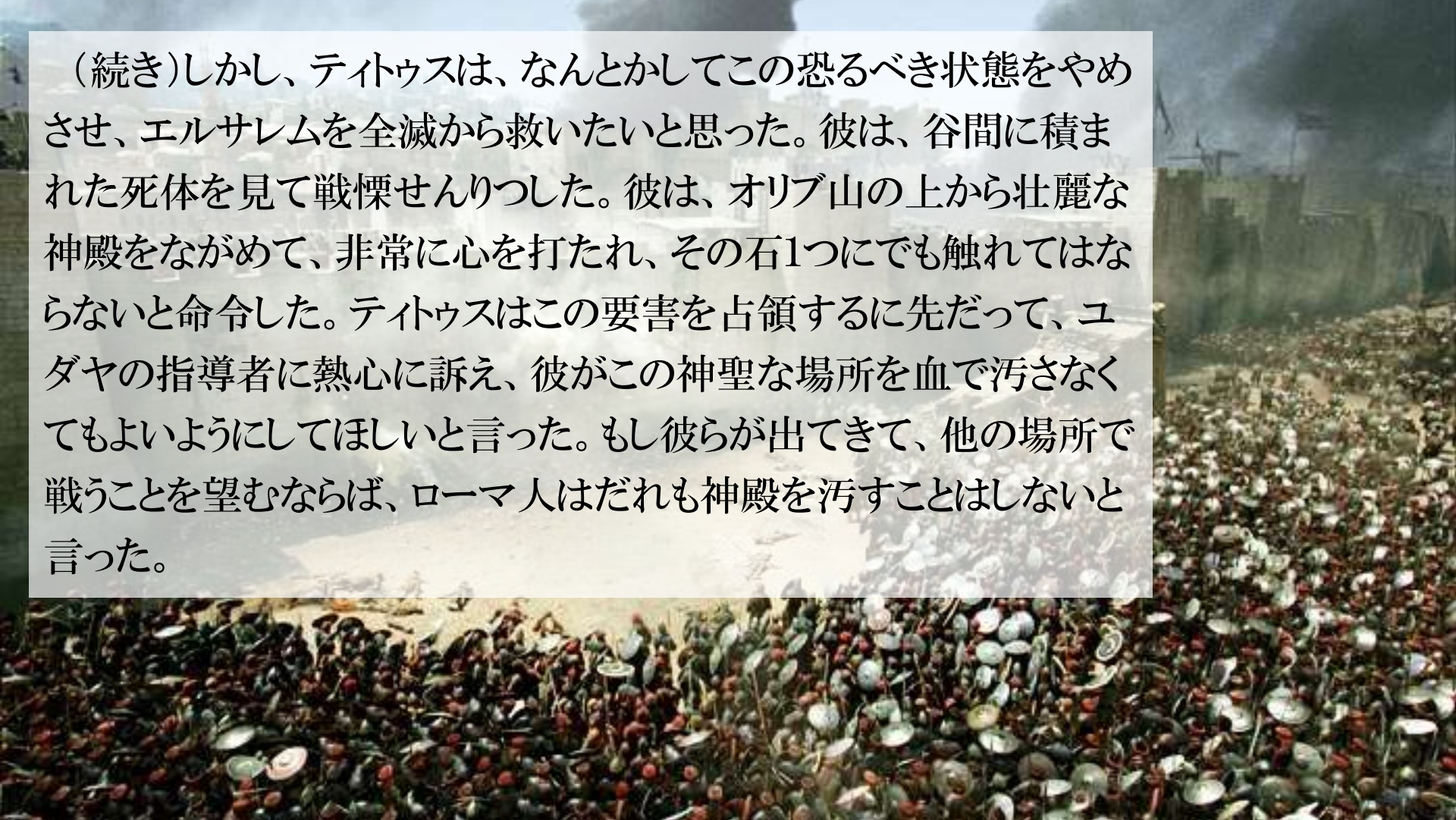
神殿燃ゆ

「ローマの将軍たちは、ユダヤ人を脅かして、彼らを降伏させようとした。彼らは抵抗した捕虜をむちで打って苦しめ、都の城壁の前で十字架にかけた。こうして、殺される者が毎日何百人とあった。そして、この恐ろしいことは、ヨシャパテの谷一帯とカルバリーに無数の十字架が立てられ、その間を歩くことさえ困難になるまで続いた。ピラトの法廷で叫ばれた『その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい』という恐ろしいのろいの言葉は、このように悲惨な罰となった(マタイ27:25)。



(続き)しかし、ティトゥスは、なんとかしてこの恐るべき状態をやめさせ、エルサレムを全滅から救いたいと思った。彼は、谷間に積まれた死体を見て戦慄せんりつした。彼は、オリブ山の上から壮麗な神殿をながめて、非常に心を打たれ、その石1つにでも触れてはならないと命令した。ティトゥスはこの要害を占領するに先だって、ユダヤの指導者に熱心に訴え、彼がこの神聖な場所を血で汚さなくてもよいようにしてほしいと言った。もし彼らが出てきて、他の場所で戦うことを望むならば、ローマ人はだれも神殿を汚すことはしないと

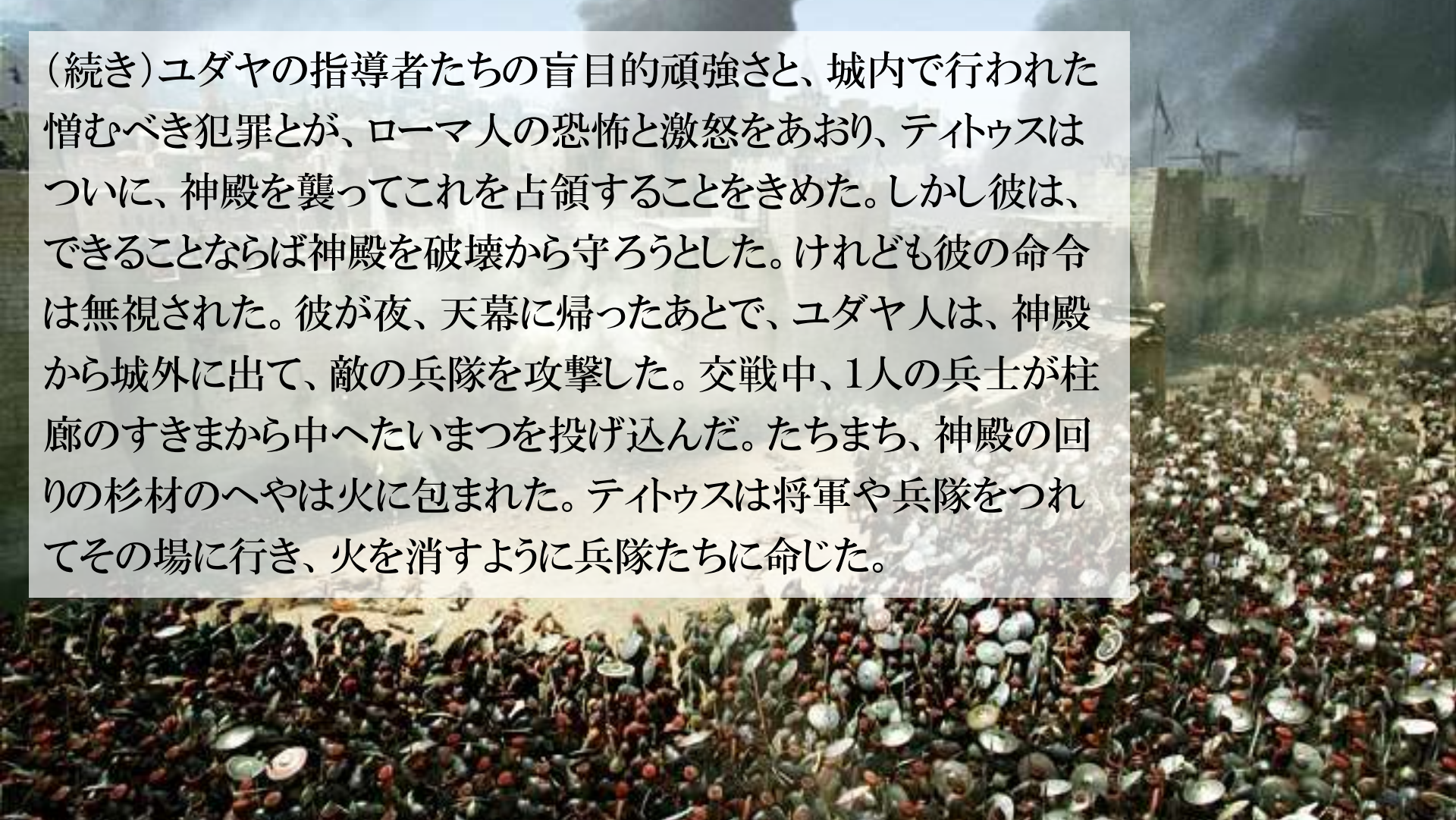
言った。



(続き)ヨセフス自身も大いに熱弁をふるって、ユダヤ人に降伏をすすめ、自分たちを救うと共に都と神殿とを救うように訴えた。しかし、こうした言葉に対して、彼は激しいのろいの声を浴びせられた。最後の調停者として訴える彼に、投げやりが投げられた。ユダヤ人は、神のみ子の懇願を退けてしまったが、今では忠告も懇願もただ彼らの心をかたくなにしてあくまで抵抗させるだけであった。神殿を滅ぼすまいとしたティトゥスの努力はむだであった。彼より偉大なお方が、その石1つでもくずされずに、他の石の上に残ることはないと言われていたのである。



(続き)ユダヤの指導者たちの盲目的頑強さと、城内で行われた憎むべき犯罪とが、ローマ人の恐怖と激怒をあおり、ティトゥスはついに、神殿を襲ってこれを占領することをきめた。しかし彼は、できることならば神殿を破壊から守ろうとした。けれども彼の命令は無視された。彼が夜、天幕に帰ったあとで、ユダヤ人は、神殿から城外に出て、敵の兵隊を攻撃した。交戦中、1人の兵士が柱廊のすきまから中へたいまつを投げ込んだ。たちまち、神殿の回りの杉材のへやは火に包まれた。ティトゥスは將軍や兵隊をつれてその場に行き、火を消すように兵隊たちに命じた。



(続き)しかし、その命令は顧みられなかった。怒り狂った兵隊たちは、神殿に隣接したへやにたいまつを投げ込み、そこに避難していた多くの者を剣にかけて殺した。血が神殿の階段を川のように流れた。幾千というユダヤ人が死んだ。戦いの物音に混じって、「イカボデ」—栄光は去ったと叫ぶ声が聞こえた。

テイトゥスは、兵隊たちの激しい怒りをしずめることが不可能であることを知って、将校たちと共に中に入り、神殿の内部を調査した。



(続き)彼らはその壮麗さに目を見張った。そして、火はまだ聖所まで回っていなかった。必死になってこれを守ろうとし、飛び出して行って、ふたたび兵隊たちに火の進行を止めるように訴えた。百卒長リベラリスは、その職権によって、服従をしいようと試みた。しかし、皇帝への尊敬でさえ、ユダヤ人に対する激しい敵意と戦いの恐ろしい興奮と略奪に対する飽くことを知らない欲望の前には、どうする力もなかった。兵隊たちは、金色に輝く周囲のものがみな、燃えさかる炎に照りはえるのを見て、聖所の中には無数の宝物がたくわえられていると考えた。



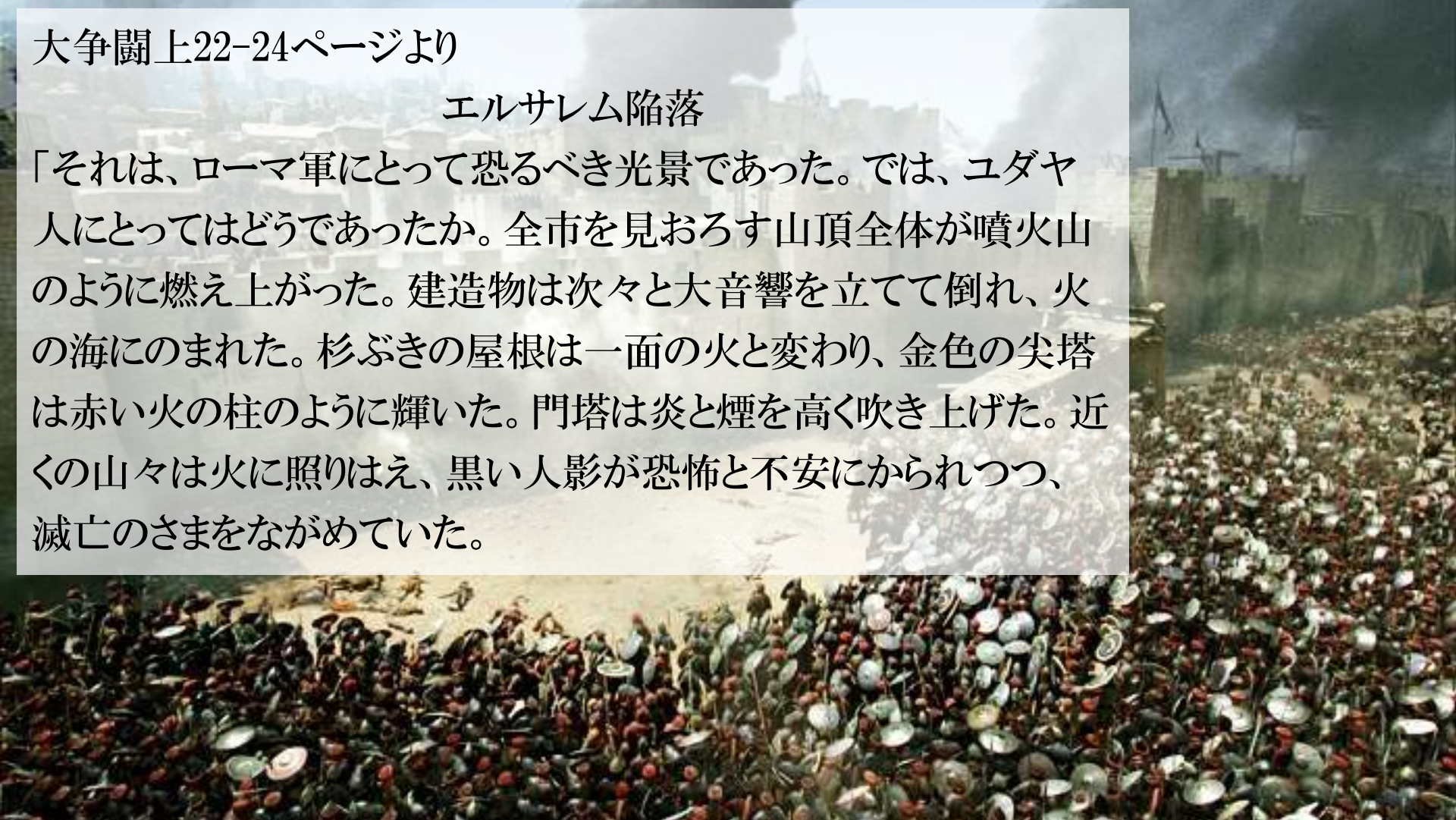
(続き)だれも気づかないうちに、1兵卒が、とびらのちよ
うつがいの間から火のついたたいまつを中に投げ入れ
た。建物全体は、一瞬のうちに炎に包まれた。立ちこめ
る煙と火のために、将校たちは、避難するほかなかつ
た。そして、広大な建物は、焼失するままになってし
まった」。



大争闘上22-24ページより

エルサレム陥落

「それは、ローマ軍にとって恐るべき光景であった。では、ユダヤ人にとってはどうであったか。全市を見おろす山頂全体が噴火山のように燃え上がった。建造物は次々と大音響を立てて倒れ、火の海にのまれた。杉ぶきの屋根は一面の火と変わり、金色の尖塔は赤い火の柱のように輝いた。門塔は炎と煙を高く吹き上げた。近くの山々は火に照りはえ、黒い人影が恐怖と不安にかられつつ、滅亡のさまをながめていた。

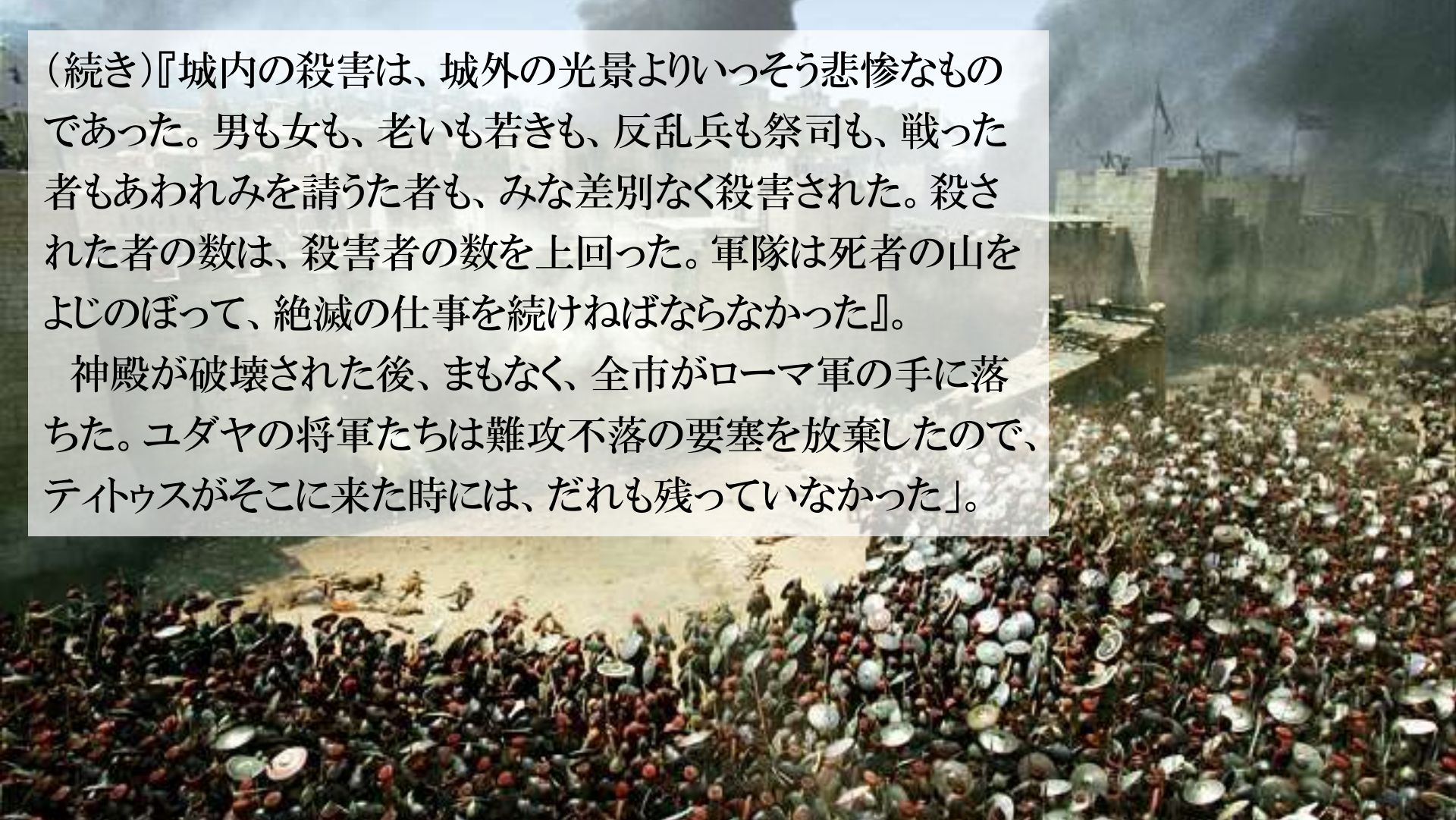


(続き)都の城壁と高台のほうにも、絶望に青ざめた人々や、無益なふくしゅうの念に顔をしかめた人々が群がっていた。走り回るローマの兵隊の叫び声や、炎の中で倒れる反乱兵たちのうめき声が、猛火のうなりと材木の落下する大音響に混って聞こえた。高台の人々の叫び声が山々にこだまし、城壁の回り一面に、泣き叫ぶ声と嘆き悲しむ声が満ちた。飢えて死にひんしている人々は、わずかに残った力をふりしぼって、苦悩と悲痛の叫びをあげた。

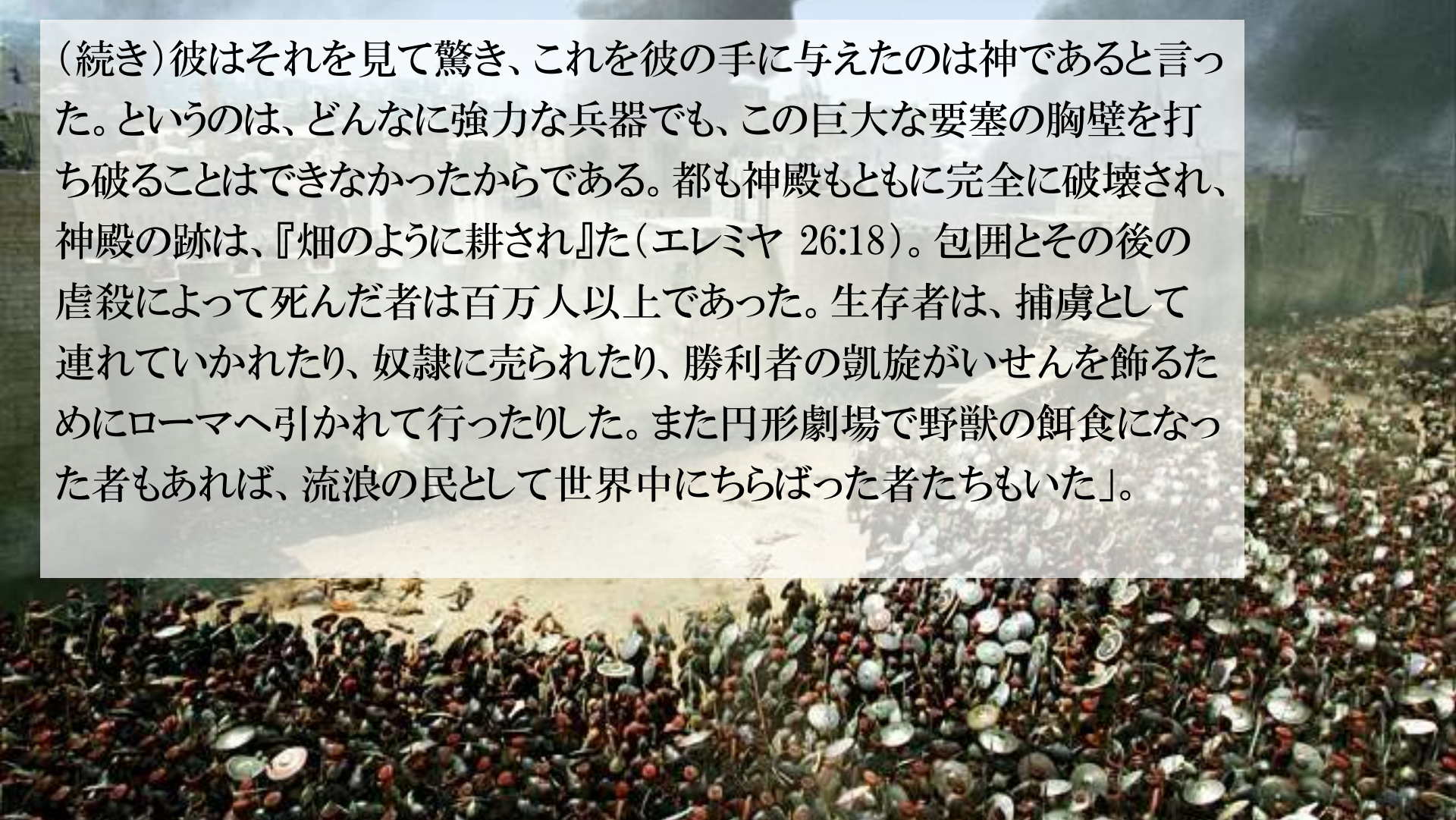


(続き)『城内の殺害は、城外の光景よりいっそう悲惨なものであった。男も女も、老いも若きも、反乱兵も祭司も、戦った者もあわれみを請うた者も、みな差別なく殺害された。殺された者の数は、殺害者の数を上回った。軍隊は死者の山をよじのぼって、絶滅の仕事が続けねばならなかった』。

神殿が破壊された後、まもなく、全市がローマ軍の手に落ちた。ユダヤの將軍たちは難攻不落の要塞を放棄したので、ティトゥスがそこに来た時には、だれも残っていなかった」。



(続き)彼はそれを見て驚き、これを彼の手にとったのは神であると言った。というのは、どんなに強力な兵器でも、この巨大な要塞の胸壁を打ち破ることはできなかったからである。都も神殿とともに完全に破壊され、神殿の跡は、『畑のように耕され』た(エレミヤ 26:18)。包囲とその後の虐殺によって死んだ者は百万人以上であった。生存者は、捕虜として連れていかれたり、奴隷に売られたり、勝利者の凱旋がいせいを飾るためにローマへ引かれて行ったりした。また円形劇場で野獣の餌食になった者もあれば、流浪の民として世界中にちらばった者たちもいた」。



「かつてなかったほどの悩みの時」が、まもなくわれわれの前に展開する。
それだからわれわれには、1つの経験—今われわれが持っておらず
また多くの者が怠けて持とうとしない経験—が必要なのである。

現実の困難というものは、予想したほどではないということがしばしばある。
しかし、われわれの前にある危機の場合は、そうではない。
どんなに生々しく描写しても、この試練の激しさには、どうても及ばない。
この試練の時に、人間は、みな、自分で神の前に立たなければならない。

われわれの前にある苦悩と苦悶の時は、疲労と遅延と飢えに耐えることのできる信仰、すなわち、激しく試みられても落胆しない信仰を要求する。その時に備えるためにすべての者に恩恵期間が与えられている。

- 大争闘下395



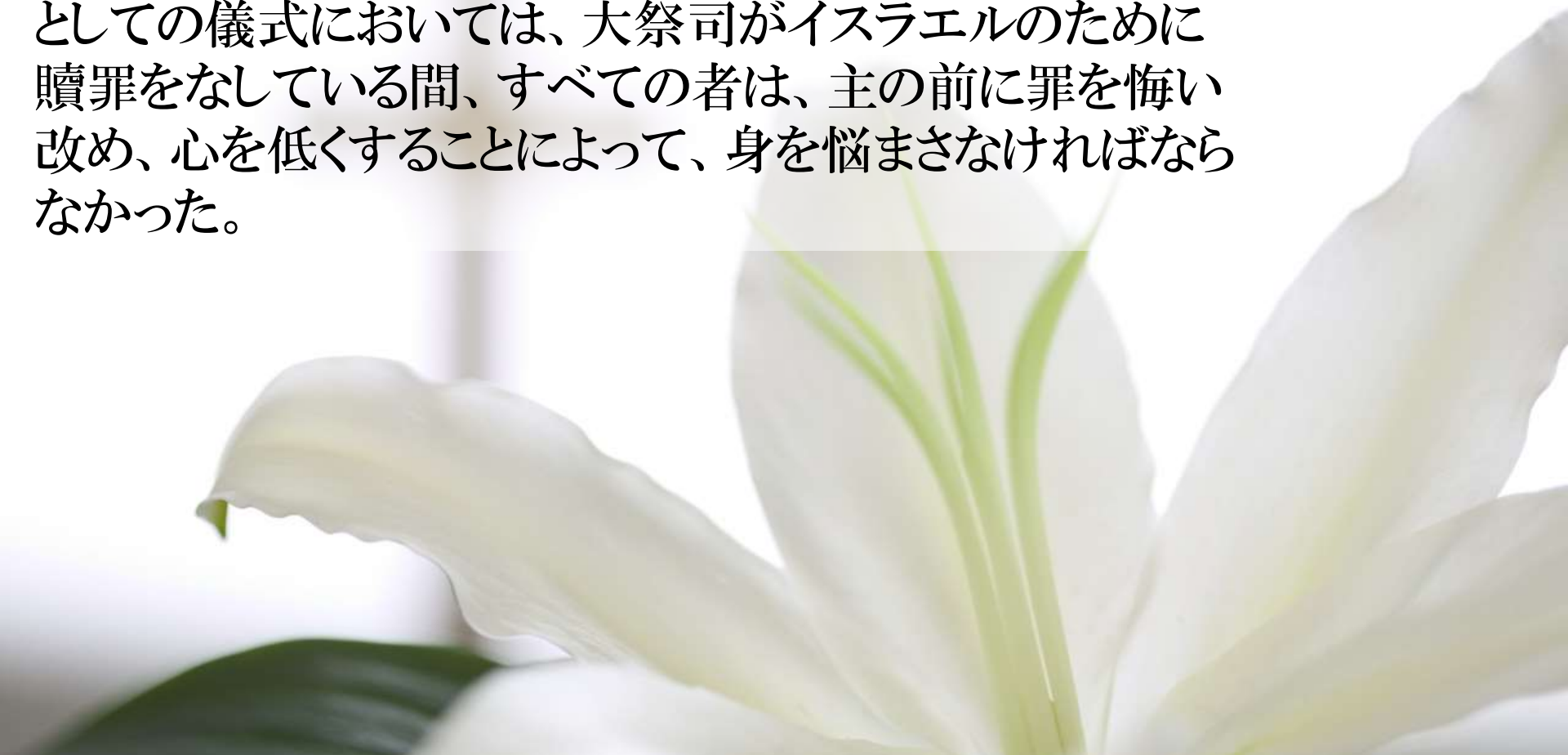
唯一の安全は、神の言葉に提示されている真理を隠された宝のように探り調べることである。

安息日、人間の性質や、イエスの証、預言の霊といった課題は理解されねばならない重要な大真理である。

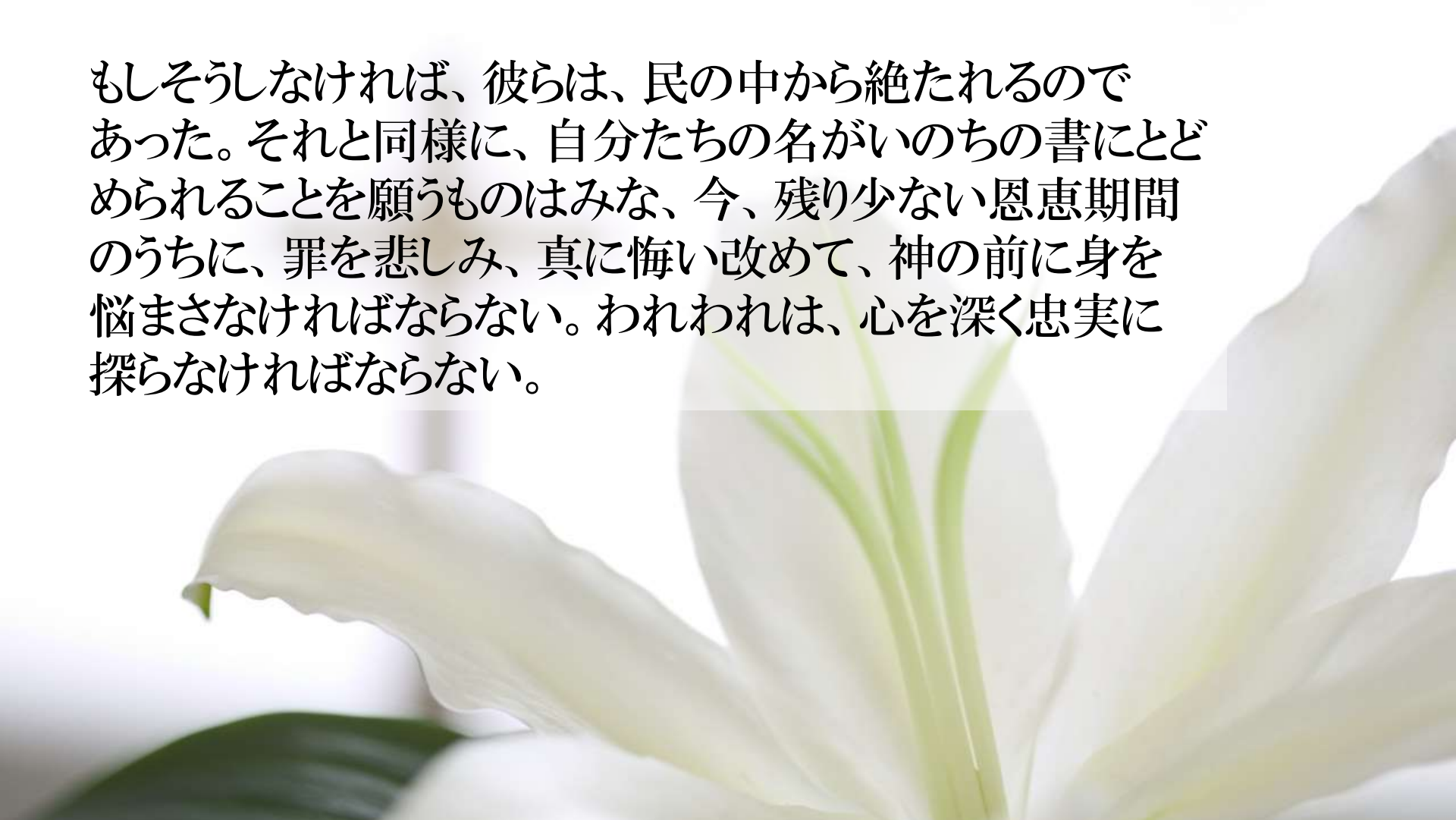
これらの真理は、この危険な時代に神の民をつなぎとめる錨となるであろう。

- 教会への証 I 300ページ

われわれは、今、大いなる贖罪の日に生存している。型としての儀式においては、大祭司がイスラエルのために贖罪をなしている間、すべての者は、主の前に罪を悔い改め、心を低くすることによって、身を悩まさなければならなかった。



もしそうしなければ、彼らは、民の中から絶たれるのであった。それと同様に、自分たちの名がいのちの書にとどめられることを願うものはみな、今、残り少ない恩恵期間のうちに、罪を悲しみ、真に悔い改めて、神の前に身を悩まさなければならぬ。われわれは、心を深く忠実に探らなければならぬ。



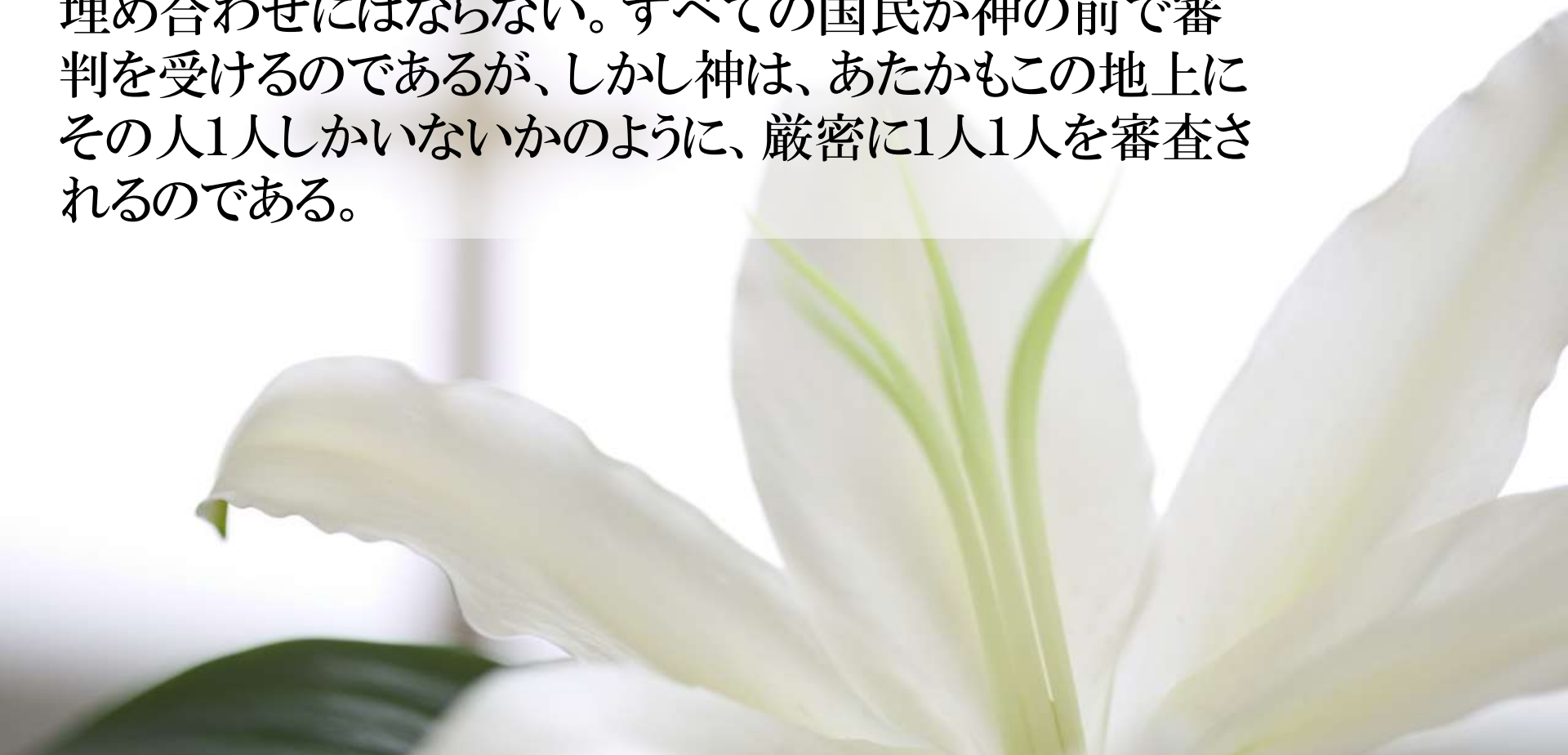
多くの自称キリスト者がいだいている軽薄な精神は、捨て去らねばならない。われわれを打ち負かそうとする悪癖に勝利しようとする者は、みな、はげしく戦わなければならない。



準備は、1人1人がしなければならない。
われわれは、団体として救われるのではない。



1人の者の純潔と献身は、これらの資格を欠く他の人の埋め合わせにはならない。すべての国民が神の前で審判を受けるのであるが、しかし神は、あたかもこの地上にその人1人しかいないかのように、厳密に1人1人を審査されるのである。



すべての者が調べられねばならない。そして、しみもしわもそのたぐいのものがいっさいあってはならないのである。

- 大争鬪下224

